トンガ王国を訪問して

三　上　紀　史

1．研修グループ結成までの経緯

大東文化大学創立80周年記念事業の一つとして，2003年８月18日から８月26日までの９日間にわたり，トンガ研修旅行が実施された．私はその研修旅行に，団長として同行した．

80周年記念事業の推進体制が整ったのは，2002年１月ごろである．そのとき「80周年記念事業委員会」が設立され，この親委員会のもとに，四つの委員会が設けられた．その一つが「80周年記念学術・教育事業推進委員会」である．私は当時，文学部長を務めていた関係で，この委員会の委員になっていた．この委員会には，たくさんの記念事業計画案が持ち込まれ，委員会はそれらを取り上げるか，取り下げるかについて，真剣に検討しつづけていた．

それらの計画案の中に，国際関係学部から提出された「トンガ研修旅行案」が含まれていたのである．その最初の計画は，観光船をチャーターして200人の大研修団をトンガに送り込むという壮大なものであった．この計画は，初めは魅惑的にみえた．しかし，費用がかかりすぎること，トンガに滞在する期間よりも，船上にいる期間の方が長いこの旅行に，どういう意義があるのか，などの疑問が生じ，議論はたちまち現実路線に修正された．しかし，なぜ研修先がトンガなのか，という根本

の問題が依然として残った．たしかに，1980年以来，本学はトンガの学生を留学生として受け入れ，トンガの学生たちはラグビーの選手として本学に貢献した．また，現国王ツポー4世は，本学の名誉博士でもある．本学を卒業したマサソ・パウンガ氏は，現在トンガの労働・通産・観光の三つの大臣を兼任して活躍している．しかし，これまでのトンガと本学との友好関係を重んじ，それを促進するためにトンガを訪れるという名目だけでよいのか．もし学生たちをトンガに送るとしたら，彼らはトンガから何を学ぶのか．学生に言語と文化を学ばせるとしたら，別の国が適しているのではないか，などの疑問も生じてきた．学生を中心に研修グループを結成するという案ははじめから主流であった．

やがて委員会はトンガという国がどんな国なのか，その現状を知らないままで議論していることに気がついた．そこで委員会は，環境創造学部の川村千鶴子教授を招いて講義をしてもらうことにした．川村教授は，文部科学省の科学研究費を得て，南太平洋諸国の経済発展と環境問題について現地調査を行い，帰国していた．このセミナーでわれわれは，トンガが夢の島ではなく，経済と環境に関して深刻な問題に直面している国であり，また興味ある歴史と文化をもつ国であることを知った．そこで次のような意義と目的を掲げて，トンガ研修旅行は実施されることになった．

1．いままでのトンガ王国との友好関係を重んじ，さらにそれを促進すること．
2．南太平洋の諸国は，特に経済と環境の点から，21世紀における問題の地域となっている．この問題がどこにあるかを把握すること．
3．南太平洋の諸国は，多様な文化をもっている．トンガの歴史・文化・生活習慣などから学ぶこと．

派遣する学生は，全学から希望者を募集して選抜し，派遣学生の費用の大部分は学園が負担することも決まった．応募した学生は92名であった．その中から書類選考と面接によって12名が選ばれた．選考にあたっては，学業成績・目的意識・協調性・明朗性・学部のバランスなどが考慮された．トンガはバイリンガルの国であり，英語が公用語として使われている．トンガ滞在中は英語力が必要となるはずである．しかし，学生の英語力は選考基準とはならなかった．この研修旅行には英語力よりも必要な素養がいるので，この選考方法は正しかったといえる．

引率スタッフとしては，「記念学術・教育事業推進委員会」の委員でもあった外国語学部英語学科の奥田祥子教授，同じく委員であった学務課の鏡保幸氏，カメラマン役を兼ねて広報課の多ヶ谷公佑氏，それに私が同行することになった．実は，委員会の委員長であった元学務局長の鈴木一道教授が団長に予定されていたが，鈴木教授の都合により，私がこの役を引き受けることになった．ここに総勢16名の研修グループが結成された．トンガになじみの深い鏡氏が実質上の団長の役を務め，われわれは氏を補佐することにした．

大きな計画が決まったあと，委員会幹事の小田嶋武行文学部事務長，委員会委員の中田智子学務部長，それに鏡氏などが中心となって，細かいスケジュールが検討された．鏡氏とマサソ大臣の間でトンガ滞在中の具体的スケジュールが話し合われ，トンガ側の手配はマサソ大臣にまかせられた．

2．ブルームフィールド教育大臣訪問と国会見学

われわれ一行は8月18日（月）19時に成田を出発して，ニュージーランドのクライストチャーチとオークランドを経由して，実質約20時

間かかってトンガのファアモツ空港に着いた．空港では，マサソ大臣とラグビー元日本代表のシオネ・ラトウ氏の出迎えを受けた．ラトウ氏は空港の税関に勤めているので，仕事を兼ねていたのである．空港からホテルにむかう車の窓から外を見ると，夜空を背景にヤシの木立がシルエットとなって飛び去っていく．これを見て，私は南太平洋の一つの島に来たことを実感した．われわれがデートライン・ホテルにチェックインしたのは，現地時間の夜の9時30分ごろであった．

翌日の8月20日（水）に，われわれ16名は，教育大臣ブルームフィールド氏に会うために，トンガ教育庁を訪れた．ブルームフィールド大臣は，73歳の現在最長老の大臣で，髭の大臣として知られていた．しかし，その時は髭がなく，実に若々しく見えた．私が英語で堅苦しいあいさつを長々と述べると，大臣は母の遺言によって髭を剃ったいきさつをユーモラスに語った．会話は通訳なしの英語で行われた．私が「トンガの学生は大東文化大学に大いに貢献している」と言うと，大臣は「大東文化大学はトンガに大いに貢献している．帰国した学生は，マサソ大臣をはじめ，各界で活躍している」と言った．

大臣の話の中で興味をひいたのは，トンガ人と日本人の共通起源説である．大臣によると，トンガ人の祖先は，蒙古からインドシナ半島を通ってこの地にやってきた．だからトンガの子どもにも，日本の子どもと同じように蒙古あざがあるのだという．この珍説に私は驚き，また愉快に思った．現在のトンガ人と日本人は，体格も容貌もあまりにも違いすぎる．共通の祖先をもつという説は，どうみても説得力はなさそうにみえる．私が体格の違いを口にすると，大臣は黙って真剣な顔をしていた．ブルームフィールド大臣は，かつてトンガ高校で歴史と英語を教え，校長を務めたこともある学者である．彼がでたらめを言っているとも思われない．

聖書をひもとくまでもなく，人類は共通の祖先をもつとよく言われる．事実，人類はあらゆる人種共通の肉体と精神の構造をもっている．この共通要素を意識することこそ，異質の文化をもつ人間の間の友好を促進する原動力となるはずである．大臣は，トンガ人と日本人の友好促進のための象徴的原動力として，蒙古あざをあげたのかもしれない．

大臣が説明したトンガの教育制度のなかで，興味を引いたのは，そろばん教育と日本語教育についてであった．トンガの小学校では，3・4・5年生の3年間，そろばんが義務教育として教えられている．また，日本語は中学と高校で選択科目として教えられているという．

学生からもいろいろな質問が出た．ある学生は「トンガにキリスト教が伝えられる前の宗教はどんなものであったか」と質問した．大臣は「トンガの古代宗教では，太陽とタコが神であった」と答えた．キリスト教がトンガに伝えられたのは，1822年のことである．今はトンガ人のほぼ100％が熱心なキリスト教徒となっている．宗派はメソジスト，カトリック，英国国教会派などが多い．現在，タコは神の座を追われてトンガ料理に使われ，トンガの食卓を彩っている．私はトンガ滞在中，古代の神がサラダの中にきざみ込まれて「タコサラダ」に変身しているのを知り，何度も食したのである．まことに美味であった．

約1時間の会談の後，ブルームフィールド大臣は国会に列席するためにいそいで出かけていった．われわれも国会を見学することになっていたので，大臣のあとを追うように議事堂に向かった．議事堂は教育庁から歩いて数分のところにあった．議事堂といっても，それは小さな平屋の建物である．傍聴席がないので，議場の片隅に4つ椅子を用意してもらい，われわれは約15分ずつ順番に傍聴した．

議員たちは長方形にむかいあって座っていた．中央の議長をはさんで左側に貴族議員（9名），右側に平民議員（9名）が座り，閣僚は議長

のむかい側にならんで座っていた．島の代表の平民議員と貴族議員が交互に立って，トンガ語で議論していた．議論の内容はわからなかったが，静かなやりとりのように見えた．小規模の学部教授会にどこか似ている．違いは一人一人の議員の前に，名前を記したプレートと，背の高いマイクが置いてあることである．私はブルームフィールド大臣に目礼し，マサソ大臣の座席の位置を確かめて退席した．マサソ大臣は閣僚ナンバー２の席に座っていた．

３．ホストファミリーとの交流会 ── カバの儀式と民族舞踊

同じ日の８月20日の夜に，トンガ・ナショナルセンターで，学生たちのホームステイ先のファミリーとわれわれとの交流会が開かれた．われわれ研修グループがホスト側である．それは豪華なトンガ料理と，伝統の民族舞踊を楽しむ会でもある．出席者は，ホストファミリーのほかに，マサソ大臣夫妻，シオネ･ラトウ氏夫妻，鏡氏の助手役のマーシー氏などである．テヴィタ・マーシー氏は20歳代後半のトンガ人で，トンガ通産省に勤務している役人である．彼は大東文化大学の出身ではなく，高崎経済大学と近畿大学大学院を出ていた．日本に留学中，彼はよく東松山キャンパスを訪問し，鏡氏とは親しい間柄であった．彼は日本語も英語もネイティヴのごとく堪能であった．彼はわれわれのほとんどの活動に同行し，あるときは案内役や通訳として，またあるときは運転手として活躍していた．

ホストファミリーのほとんどは，自分の子どもを日本に留学させているか，させたことのある人たちである．通訳は，大東文化大学への最初のトンガ留学生のポポイ氏が務めた．

民族舞踊のショウに先だって，カバの儀式（Kava Ceremony）という

不思議な儀式が行われた．女性の司会者がまず，カバの伝説を語った．それは観客に衝撃を与える悲しい物語だった．

昔，トンガタプ島の近くの島に，貧しい夫婦が住んでいた．夫婦には，長い間病床に臥している一人娘がいた．その娘の名をカバといった．ある日，トンガタプ島からその島に王様がやってきた．島の住民をつぎつぎと訪問した王様は，ついにその貧しい夫婦の家にやってきた．その夫婦には，王様をもてなす食物がなかった．唯一の食物のイモを，王様は背もたれに使っていた．困っている両親を見て，病床の娘は言った．「私はもう助かる見込みがありません．私を料理して王様にさしあげて下さい」夫婦は泣く泣く，娘を殺して料理し，王様に差し出した．王様はその料理を見てすべてを察し，「私はあなたがたの娘を食べるわけにはいかない．丁重に葬ってあげなさい」と言って帰った．やがて娘の墓から２本の木がはえてきた．頭のあたりから生えたのがカバの木で，足から生えてきたのがサトウキビである．その貧しい夫婦はこの２本の木を王様に献上し，この２本の木はトンガの重要な作物となった．

カバとは，伝説の少女の名であり，木の名であり，また，飲物の名である．飲物のカバの作り方は，まずカバの木の根を乾燥させ，たたいて粉にする．その粉を布の袋に入れ，水の中でもむとカバのエキスが水に溶ける．それをココナツのカップに入れて飲むのである．カバにはアルコールは含まれていない．少し麻酔性があり，興奮や不安を鎮める作用があるという．カバの儀式とは，これを飲む儀式である．

学生たちが舞台に呼ばれてあがった．マサソ大臣と鏡氏が，私に舞台に上るよう促した．私は観客席にいる方が良く見えるからと，もっともらしい理由を言って断った．カバの儀式がはじまったとたん，私は舞台に上らなかったことを後悔した．この後悔は帰国後もしばらく続いた．そして，私は今でも後悔している．学生たちが舞台に上り，あぐらをか

いて円座すると，主客役のトンガ人の男性が，まずカバの飲み方の模範を示した．次に主客が学生の名を一人ずつ呼ぶ．呼ばれた学生は柏手(かしわで)(手のひらを少しまるめて打つ)を一つ打つ．すると運び屋の女性が，舞台の上でしぼられたばかりのカバを入れたココナツカップを学生の前に運んでくる．学生たちはみな難なく飲んでいるようだった．それは静かで不思議な儀式であった．日本の茶の湯にいくらか似ている．学生たちにその味について聞いたところ，ややにがく，口の中がしびれるような不思議な味がしたとのことである．

私はあとでこの儀式の意味についてマーシー氏にたずねてみた．彼は，この儀式は結婚式・葬式・各種の祝賀会など，人の集まるところで任意に行われる，と説明しただけで，特に意味については触れなかった．意味をきくこと自体が無意味であったかもしれない．トンガの人たちは，カバを飲むことによって，少女カバの悲しみに思いをはせているのかもしれない，と私は空想した．カバの悲しみとは，愛にあふれながら貧困にあえぐ家に，強力な力が訪れてきて，その力に対して犠牲をはらって饗応しなければならない悲しみである．それは現代文明が押しよせ，その力にトンガの美しい自然と習慣が犠牲を強いられている状況の比喩のようにもみえる．カバの儀式とは，少女カバの涙のにがみとしびれを味わうことによって，興奮や激情を鎮め，その宿命の意味を静かに瞑想する儀式のように見えた．

カバの儀式が終わると，伝統の民族舞踊がはじまった．男性の舞踊も女性の舞踊も，時の流れにゆるやかに乗るしぐさのように見える．激しいリズムの舞踊もある．しかし，それは人間の激しい情念を表現しているというより，自然の荒々しさを模倣しているように見えた．

4．JICA（国際協力事業団）トンガ事務所訪問とトンガタプ島一周の史跡めぐり

8月21日に，われわれはトンガタプ島一周のツアーに出かけた．その途中，ＪＩＣＡのトンガ事務所を訪れ，首席駐在員の石川満男氏の話をうかがった．このセミナーで，われわれはトンガの全体像と，現在トンガが直面している問題点を知ることができた．石川氏はトンガが直面している問題として，次のようなものをあげた．まず海の資源が少なくなっていること．採取することを規制してもなかなか守られないこと．トンガにはマラリアなどの熱帯性の病気がないかわりに，成人病が多いこと．特に糖尿病が多い．病院で食べ物を制限すると不満が出る．見舞客が病院に食べ物を持ってくるので，糖尿病がますますひどくなる．南太平洋の海はゴミで汚染されている．トンガはゴミの処理の問題にむけて全く動いていない．トンガ人は仕事中心の生活を送っていない．熱したらすばらしい働きをするが，長つづきしない．大学出の年収が日本円にして85万円くらいなのに，物価は高い．輸出する農産物のうち，日本むけのかぼちゃは大きな割合を占めている．しかし，それは日本で取れない時季に輸出する，いわゆるすき間産業である．ニューカレドニアが輸出をはじめると，トンガのかぼちゃ産業は危ない．ニューカレドニアは日本により近く，運賃が安いからである．石川氏はそのほかに，トンガの教育問題，ＪＩＣＡの事業の取りくみ方や成果などについて詳しく話した．

石川氏の話を聞いていると，トンガは夢の島ではなく，現代の難問をかかえてあえいでいるゴミの島のように思えてきた．ところが，氏は次のような印象深い述懐をつけ加えた．「トンガ王国は１千年以上の歴史と豊かな文化を持っているので，その生活習慣を変えることは難しい．

いつも私の心にかかっていることがある．それは，トンガを変える必要があるのか，仕事中心の生活は人間本来の生活といえるのか，幸せとは何か，むしろトンガから学ぶことはたくさんあるのではないか，ということである」

たしかに，途上国の援助という目的で行われているこの事業は，〈変化〉という結果を求めている．この場合の変化とは，〈進歩〉や〈改革〉と同じ意味である．進歩しなければならないという考え方は，先進国を自認する国の傲慢さから生じた強迫観念かもしれない．トンガの人々は，現代文明と古い生活習慣の衝突で苦悶しているようには見えない．現代文明を拒絶も歓迎もしていない．ゆうゆうと自然に身をまかせているように見える．

このセミナーは，学生から環境・教育・歴史などに関する鋭い質問が出て大いに盛り上がった．

ＪＩＣＡのトンガ事務所を出たわれわれは，トンガ観光省のマイクロバスに乗り込み，女性のガイドにともなわれて，トンガタプ島一周のツアーに出かけた．バスの窓から，イモ畑やカボチャ畑，ヤシの木立，こうもりが果物のようにぶらさがっている森林，親ブタのあとを４，５匹の子ブタがよちよち歩いている光景を見ていると，やはりトンガはゴミの島ではなく，夢の島のように見えてきた．バスは島の南側の海岸に着いた．バスから降りると，目にしみるような青い海が広がっている．ごつごつした岸壁がえんえんと続いている．岸壁に波が打ちよせるたびに，岸壁の間から天に向かって水柱が吹き上る．ここが有名な〈潮吹き穴〉(Blow Holes) である．その荘厳な光景に，私は息をのんだ．この真青の海がゴミに汚れているようには見えない．私はサマセット・モームの南太平洋ものの短篇の一つ「マッキントッシュ」(“Mackintosh”) の一節を思い出した．「あの波の音は永遠につづき，だれもそれを止める

ことはできないと考えると，彼はどうしても我慢できない気がした．そしてこの情け容赦のない大自然の力に対抗できる力が自分にあるかのように感じ，なにか荒々しいことをやってみたいという狂おしい衝動にかられるのだった」

実は，私はこれとは反対のことを考えていた．このような美しい自然を見ていると，この美しさに満足して，その満足感が天の摂理であるかのように思い，それを観照すること以外には，何もする気がしなくなるのではないか．トンガとはそういう国ではないか，と．

5．ツポー4世国王謁見

8月22日の朝，われわれはツポー4世国王に謁見するために宮殿に向かった．国王は85歳の高齢で，近ごろは外国からの訪問客には会わないことにしている，とわれわれは聞いていた．親日家の国王は，例外的にわれわれの謁見を許したのである．ところがここで問題が生じた．日本を出発する前の打ち合わせでは，謁見にのぞむ服装として，男子はスーツかジャケットにネクタイ，女子は白ブラウスに黒ズボンかスカートを着用する，ということだった．謁見直前に，宮殿側からマーシー氏を通して，女子はスカートを着用のこと，という通達があった．8人の女子の学生のうちスカートを着用していたのは一人で，あとはすべてズボンを着用していた．4人の男子学生はすべてジャケットにネクタイをしていたので合格であった．しかし，学生を区別するわけにはいかないので，学生は全員謁見をとりやめることにした．そこで，スタッフ4人とマーシー氏が謁見にのぞむことになった．学生たちの落胆は激しく，私も団長として責任を感じた．まさにダンチョー（断腸）の思いであった．それはこの旅行中の，グループとしての唯一の失敗であった．

奥田教授が「近頃の学生はスカートをはかなくなったんですよね」と言った．私はその事実に気づかなかった．研修グループのほとんどの女子学生がズボンを選んだのは，その日常的習慣によるのか．日常的習慣を儀礼の領域に持ち込むことは危険である．社会の中の人間は，リラックスした個人的な日常的次元の領域から，最も堅苦しい儀礼の領域まで，おのおのの段階に応じて，心とかたちを適応させながら生きている．服装はその心と形を具体化したものだ．結婚披露宴にTシャツとジーパン姿で出席したら，だれもがそれを侮辱と見るだろう．言葉をまちがえることは許されても，〈文化〉を侮辱することは許されないのだ．とはいえ，今回の場合，学生たちには何の責任もない．

ズボンがスカートに代わって広く着用されるようになったのは納得できる．ズボンは活動的であたたかい．またそれはジェンダーの差をうめる現代的風潮の影響かもしれない．ただ，女性の正装がスカートでなければならない理由はよくわからない．性差をはっきり表現することが，儀礼の世界には必要なのかもしれない．

謁見の場所は，屋外の大きなテントの中であった．国王は20メートル先のソファーに巨体をうずめて座っていた．私は東松山キャンパスで行われた国王の名誉博士号授与式に出席していたので，国王の顔には見覚えがあった．私はテントの前に立っていた衛兵に，ここを歩いて進んでいってよいのかとたずねた．すると彼はニタリと笑ってうなずいた．私は緊張して国王の前まで進んだ．マーシー氏が国王のそばの地面にあぐらをかいて座った．客人でない者は椅子に座ることが許されないのである．彼は国王とわれわれの間の会話が通じないときに，通訳をするためにそこにいたのである．しかし，実際には通訳は必要なかった．

国王は私に手をさしのべたので，私はいそいで握手した．私は立ったまま英語で長々とあいさつをした．あいさつの内容は，われわれに会っ

ていただいたことは光栄であること．われわれは創立80周年記念事業の一つとしてトンガを訪れたこと．大東文化大学は1980年からトンガの学生を16名受け入れ，学生たちはラグビーなどで大東文化大学に貢献したこと．これからも大東文化大学はトンガからの学生を受け入れ，わが大学からもトンガに学生を送って，トンガの文化を学ばせ，トンガとわが大学の友好関係を促進したいこと，などである．

国王は私のあいさつの一つのセンテンスが終わるごとにうなずいた．私のあいさつが終わると，国王はわれわれに椅子に座るように促した．私たちが座ると，国王は静かに，ゆっくりした調子の英語で話しはじめた．国王の質問の中には，「現在，日本にトンガの学生は何人いるのか」「トンガの留学生は日本語を何年間どのように学ぶのか」「日本ではＳＡＲＳの感染はどうであったか」などがあった．会話の途中で，私の前にグレープジュースのはいったグラスが運ばれてきた．私は国王の一つの質問に答えたあと，あまり意識せずに，グラスに手を取って口にもっていった．それを見た国王はすぐ自分のグラスを手に取って乾杯の仕草をした．私はおもわず「まずい！」と小声で叫んだ．まずいのはジュースではなかった．国王より先にグラスを手にしてはいけなかったのだ．私はとっさの無礼に身のすくむ思いであったが，それ以上に，私の無礼を即座に帳消しにした国王のやさしさにひどく感激した．思い出すたびに，身のすくむ思いと感激が同時におそってくる．

国王の質問が終わるのをみはからって，私は学生からたのまれていた質問を国王にした．それはトンガ３代目王朝の宮殿跡にあるハーモンガ(Ha'amonga)と呼ばれる大きな石に関するものである．門の形をしたこの有名な建造物は，一体何のために使われたのか長らく謎であった．ツポー４世は自ら調査にのり出し，この石が天体の観測に使われたことを発見したのである．この話に感激した学生は，なぜ国王自身が調査した

のか知りたかったのである．ツポー4世の答えはおよそ次のようなものであった．「私は大学では法律を学んだが，考古学にも興味があり，これは独学で学んだ．私はハーモンガをつくった人間の力に興味をもったのである．ハーモンガは中国の万里の長城に匹敵する史跡である．大きさの違いは人間の数（人口）の差である．ある国では機械を使って道路工事を行い，6年間かかって完成させた．同じ規模の道路工事を，中国では機械を使わず11カ月で完成させた．人間の力は結集するとすばらしい力を発揮するのだ」

ツポー4世は近代的な機械よりも，人間の原始的力を信じているようである．国王がソロバンのファンであるのも，そういう理由によるのかもしれないと私は想像した．

6．アコテウ小学校とクイーン・サローテ高校訪問

国王謁見のあと，われわれはアコテウ（Akoteu）小学校とクイーン・サローテ（Queen Salote）女子高校を訪問して英語の授業を見学した．この2つの学校は，同じスポンサーによるメソジスト派系の学校である．小学校では，レベル5（日本の5年生にあたる）の英語の授業を見学した．1クラス15人の子どもたちと女性教師が活発な授業を展開していた．授業はすべて英語で行われていた．はじめに先生が民話のような短い物語を朗読する．先生がこの中のむずかしい単語を抜き出して黒板に書き説明する．次に物語の内容について，先生がつぎつぎと質問する．質問が出されるたびに，子どもたちの手がいっせいに上がる．先生が指して子どもが答える．それが正解であると，全員拍手する．次に5つのグループに分かれて単語遊びをする．

案内役の先生の説明によると，英語は幼稚園から教えられる．はじめ

は英語の歌の練習など，音から学びはじめ，次第に読み書きの訓練に移る．レベル５は読む訓練に移った段階である．英語の科目だけではなく，他の科目も英語によって授業が行われている，という．

次にわれわれは，クイーン･サローテ女子高校の，日本の３年生にあたるクラスの英語の授業を見学した．生徒約30名のクラスである．教材としてニュージーランドの作家が書いた劇が使われていた．女性の教師は生徒を５つのグループに分け，各グループに１幕ずつを割りあて，各幕の人物の性格やテーマなどを調べるよう指示した．生徒たちは各グループに分かれて話し合いをする．そのあと各グループの代表がその成果を発表し，ディスカッションとなった．生徒たちは流暢な英語で討論していた．

この２つの授業を見て，私は驚きをこえて脅威を感じた．英語教育に関しては，日本はトンガよりはるかに劣っているようだ．日本では英語の必要性が叫ばれながら，なぜ効果が上がらないのか．もしかしたら，日本人は意識下で，英語は必要ないと思っているのかもしれない．英語が堪能になったトンガの人たちは，ニュージーランド，オーストラリア，アメリカ，イギリスなどに，留学するか仕事を求めて出かけるのである．英語はトンガでは生活のかかった言語なのである．

７．マサソ大臣宅での午餐会

８月24日の日曜日は，久しぶりに朝から快晴であった．その日の午後５時には，学生たちがホームステイ先からホテルに帰ってくることになっていた．その前の午後１時に，マサソ大臣宅で午餐会が開かれることになっていた．マサソ大臣がわれわれスタッフ４人を招待してくれたのである．マーシー氏がわれわれを車で迎えにくる前に，私はホテルの

近くのヌクアロファの街に1人で散策に出かけた．驚いたことに，きのうまで人があふれていたマーケットにも，銀行にも，バス停にも人の姿が全くなく，すべての店が閉まり，まるで死の町と化していた．トンガの人たちは，日曜日の午前中は教会に行って祈り，午後にはほとんどの人が昼寝をするのである．キリスト教国の中で，これほど厳密に安息日が守られている国はないにちがいない．もし観光で成り立っている国であれば，日曜日こそかせぎどきのはずではないか．活動しているのは，インターナショナルホテルだけである．

私は海岸に出た．そして朝の太陽の光をあびて輝いている海をながめながら遊歩道を歩いた．すると車道のむこうに，ひろびろとした墓地がみえてきた．先日の島一周ツアーのとき，このような墓地をバスの窓から見たことがあった．そのときは，すばやく通りすぎたので，種々の色彩が入り乱れる異様なイメージの残像が残っただけだった．ガイドはそのとき，そのカラフルな意匠は特に意味はなく，ただ美しく飾っているだけだと言った．

今見ると，どの墓もまわりには色あざやかな花が咲き乱れ，まるで花壇のようであった．真白い囲いがしてあったり，うしろにピンクのたれ幕のかかっているものもある．このように意匠をこらして墓を飾るのは何のためなのだろうか．「墓とは死んだ人に対する尊敬や愛情の念をおこさせるところである．嫌悪や恐怖の場所ではなく，悲哀と瞑想の場所である」（“Westminster Abby”）と言ったのはワシントン・アーヴィングである．トンガの墓地は，死んだ人たちとの楽しい語らいの場所なのかもしれない．現世よりも美しい所に住み，現世にいる時よりも幸せに暮らしている死者を想像したい気持ちのあらわれかもしれない．

われわれがマサソ大臣宅に着いたのは午後1時すぎであった．大臣宅はこうもりが果物のようにぶらさがっている林の中にあった．マサソ大

臣夫妻と，大臣のお父さんのカバリック氏がわれわれを迎えてくれた．プロのサーファーのアメリカ人一家も招待されていた．カバリック氏は，かつてトンガの教育大臣や副総理を歴任し，現在政界を引退して南太平洋大学の理事長(Pro-Chancellor)を務めている．氏はトンガ高校からハーヴァード大学に留学し，帰国して政界入りをした．国王から大臣に指名されたのである．ディナーの席上で，アメリカ人がカバリック氏に，トンガは王政から民主制に変わる動きはないかと質問した．カバリック氏は，現在，小さい動きはあるが，大きな動きはない，と答えた．

われわれは豪華なトンガ料理と，めずらしい情報のとびかう会話と，冬でありながら日本の初夏のような晴れた午後のふんいきを楽しんだ．

8．おわりに

トンガからの帰途われわれは，オークランドに1泊し，街を見学した．日本へ出発する前の夜，われわれはホテルの近くのレストランで，反省会という名目のもとに夕食会を開いた．その席で私は学生たちに「君たちはカバを飲んだから賢くなったはずだ．カバを飲むと頭が良くなるのだ」と言った．学生の間から「ほんとうですか？」という真剣な声が発せられた．私が「カバはバカの反対だからだ」と言うと，学生たちは，また爺(じじい)ギャグがはじまったのかとあきれた顔をして座が少々白けた．私は半分は本気で言ったのだった．カバに象徴されるトンガの文化に触れた学生たちは，たしかに賢くなっているはずである．

なお現地では，マサソ大臣，マーシー氏，ポポイ・タイオネ氏，シオネ・ラトス氏などに全面的に協力していただいた．ここに改めて感謝の意を表したい．

（本稿は学務部広報課発行の『南太平洋地域との交流（トンガを学ぶ）報告書』に掲載されたものを，少し修正して転載したものである.）